

大槻新田遺跡
発掘調査報告書

1988

山 形 県
山 形 県 教 育 委 員 会

おお つき しん でん
大槻新田遺跡
発掘調査報告書

昭和63年3月

山 形 県
山 形 県 教 育 委 員 会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した酒田市大槻新田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

発掘調査では平安時代から中世鎌倉時代にかけて連続と集落が営まれたことを示す多数の遺構や遺物が検出され、古代から中世の集落構成と生活にかかわる貴重な手がかりを得ることができました。

これらの文化遺産は、私達の祖先が自然環境と歴史の中で創造し、育んできたものであります。これらを理解し、愛護することは、祖先の歴史を知ると同時に、今日の文化を見つめる事にもなるものと思われまふ。現代に生きる私達は、これらを長く後世に伝え残して行くことが重要な責務であります。

近年、県内各地での開発事業が増加するに伴い、埋蔵文化財とのかかわりも増加の傾向にあります。この両者の間には、困難な問題も山積みの状況であります。生活文化を向上とする同じ立場から諸問題を調整し、今後とも埋蔵文化財保護のために努力を続けてまいる所存であります。

最後になりましたが、調査にあたって多くのご協力をいただきました地元の方々をはじめ、酒田市、酒田市教育委員会、庄内教育事務所、庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区他関係各位に対し、心から感謝申し上げますとともに、本書が埋蔵文化財の理解を深めその保護普及の一助となれば幸いと存じます。

昭和63年3月

山形県教育委員会

教育長 小野 孝

例 言

- 1 本書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて、昭和62年度に実施した県営ほ場整備事業（平田地区）に係る大槻新田遺跡（山形遺跡地図番号2041）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は昭和62年10月19日から同年11月20日までの延23日間実施した。
- 3 発掘調査の体制は、調査主体が山形県教育委員会、調査担当を山形県埋蔵文化財緊急調査団が実施した。現地での調査担当者は主任調査員佐々木洋治、佐藤庄一、野尻侃、調査員斎藤 宏、須賀井新人、斎藤克典、吉田洋一である。
- 4 発掘調査にあたっては、酒田市教育委員会、庄内教育事務所、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、酒田市大槻新田地区他関係機関より多くの御指導、御協力をいただいた。ここに銘記して感謝申し上げる。
- 5 本書の作成は、野尻 侃、須賀井新人が担当し、編集は野尻 侃、阿部明彦が担当し、佐々木洋治が統括した。

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号で、SB……建物跡、SK……土壌、SD……溝状遺構、SE……井戸跡、EB……柱穴である。また遺構番号は基本的に現地調査段階で検出順に付し、そのまま報告書での番号として踏襲している。遺物に付した記号はRP……土器・土製品、RQ……石製品、RW……木製品、RM……金属製品であり、遺構と同様に検出順にしたがって番号を付した。
- 2 報告書執筆の基準で、遺構分布図、同平面図中の方位は磁北を示している。なお、グリッドの南北軸は、磁北より5°西に傾いている。遺構平面図では1/40～1/160他の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付し、遺物実測図・拓影図・図版は原則的に約1/3で採録し、各々にスケールを付した。また遺物実測図中の断面で白ヌキが赤土器、中世陶磁器、黒ベタが須恵器を表している。

遺物写真は、原則的に小形の坏・椀類を1/4、大形の壺、木製品等については1/6～1/8とした。
- 3 遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物図版ともに共通のものとした。

目次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 検出遺構	
1 遺構の分布	6
(1) 掘立柱建物跡	6
(2) 井戸跡	8
(3) 土壌	9
(4) 溝状遺構	11
IV 出土遺物	
1 遺物の分析	12
2 遺構内出土遺物	12
(1) 井戸跡内出土遺物	12
(2) 土壌内出土遺物	12
(3) 溝状遺構出土遺物	14
(4) 包含層出土遺物	15
V まとめ	
(1) 遺構・遺物の時期	17
(2) 遺跡の性格	17
表1 出土遺物観察表	12

挿図目次

第1図 遺跡位置と周辺の遺跡	2
第2図 遺跡の層序	2
第3図 遺跡全体図	3
第4図 遺構分布図	4
第5図 SB1・2・3建物跡	7
第6図 SE33・88井戸跡	8
第7図 SK38・39土壌	9
第8図 SK44・47・55・61・81・84・87・89・138土壌	10
第9図 SD131溝状遺構	11
第10図 土壌内出土遺物	13
第11図 溝状遺構出土遺物	14
第12図 包含層出土遺物(1)	15
第13図 包含層出土遺物(2)	16

図版目次

図版1 遺跡近景・調査風景・精査区全景
図版2 検出遺構・遺物
図版3 出土土器(1)
図版4 出土土器(2)
図版5 出土土器(3)

I 調査の経緯

酒田市東部の平田地区に昭和62年度県営ほ場整備事業が計画され、山形県教育委員会では遺跡保護の観点から開発事業との調整を図るため、昭和62年10月5日に分布調査による試掘調査を実施した。その結果、事業区内に本遺跡の南半部が入ることになり、この包蔵内容を基に県農林水産部農地建設課、最上川右岸土地改良事務所等関係機関による協議を重ね、現水田面を深く削平する面の地域を対象とした緊急発掘調査を実施することとなった。調査を対象とする地域は本遺跡西側、大槻新田地区の南西部と、計画排水路部分及び道路部分に限定して実施した。

調査はまず調査区域内に5×5mを単位とするグリッドを設定し、グリッドを基準にして1×3mのトレンチを33ヶ所に設け、遺構・遺物の集中地域を探った。その結果X軸26～35Y軸6～15(2500㎡)を精査区として設定し、重機械を用いた表土除去、手掘りによる遺構確認面までの面整理、さらに遺構の掘り下げを行いながら、土層観察・写真・実測図等の記録を行った。また調査対象地域に係る計画農道・排水路部分においても、精査区調査と併行しながら遺構の確認、精査、諸記録作業を行った。

調査の期間は昭和62年10月19日から同年11月20日までの延23日間とした。

II 遺跡の立地と環境

総面積585㎡を測る庄内平野は砂丘・三角州・氾濫原・河間低地からなる。酒田市東部は、出羽丘陵西側に広がるこの庄内平野部に入り、水田の連なる広大な沖積地の中に位置している。この地には国指定史跡「城輪柵跡」をはじめ72ヶ所の遺跡が確認されており、そのほとんどが沖積平野内に立地し、城輪柵跡と同時期の平安時代に属している。

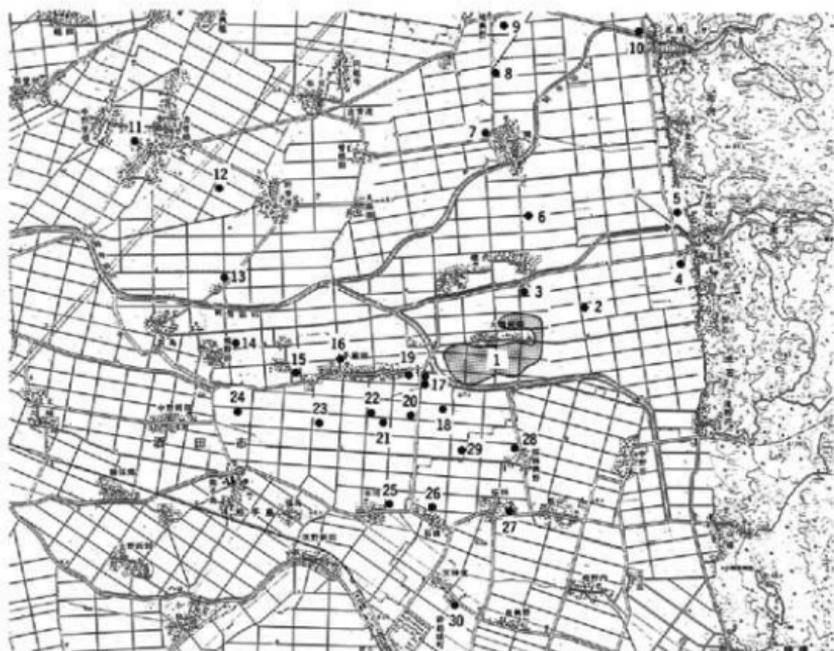
大槻新田遺跡は、酒田市街から東へ7km、酒田市大字大槻新田を中心とした水田に位置しており、標高は約6mを測る。今回の調査では、古代の集落が営まれていたと考えられる微高地の間を、幾筋かの大小の河川と比較的広範囲に渡る低湿地が見られ、複雑な様相を呈していることが知られた。このことから本遺跡は、平田川右岸に広がる河間低地内の微高地上に立地するものと考えられる。また本遺跡は城輪柵跡を中心とした方格区割に沿い、八幡町大島田とを結ぶ南北軸線上には8つもの遺跡が並ぶ。(第1図)

本遺跡の基本的な層序は、精査区東西南北壁面の各一部を観察し、第2図に示した。

第I層 水田及び畑地の耕作土で、15～20cmの厚さでほぼ均一に堆積する。

第II層 炭化物や土器片を含む遺物包含層で、5～20cmの厚さで堆積する。

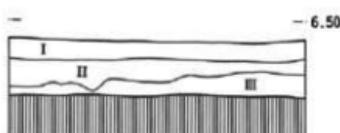
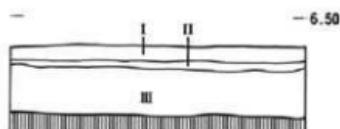
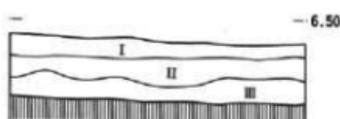
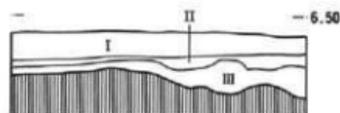
第III層 無遺物層で、II層下部または本層直上面が遺構検出面にあたる。



第1図 遺跡位置と周辺の遺跡

500m 0 1500m

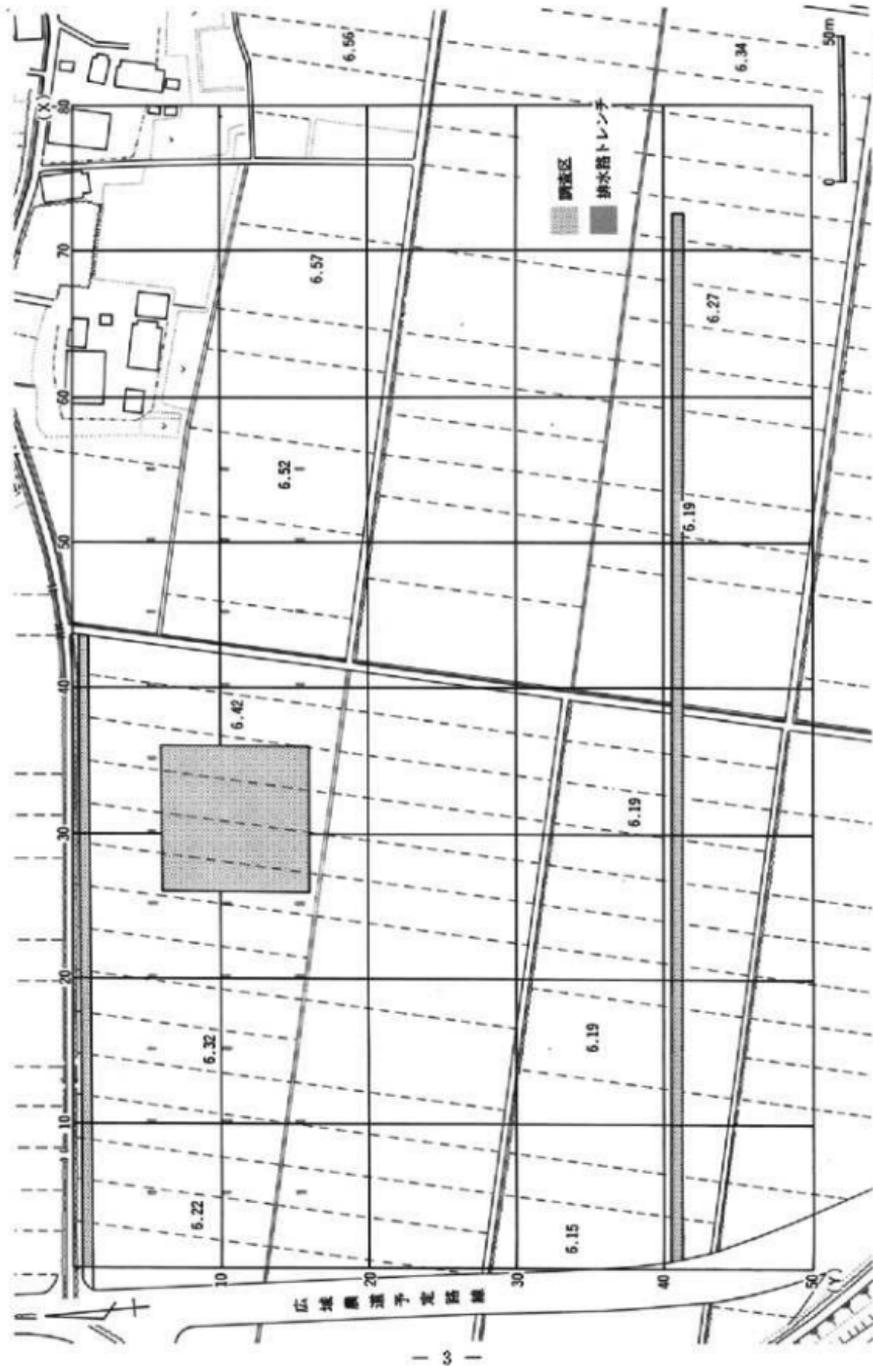
- | | | | | |
|------------|-------------|-------------|------------|------------|
| 1. 大槻新田遺跡 | 2. 生石4遺跡 | 3. 横代遺跡 | 4. 生石2遺跡 | 5. 関道遺跡 |
| 6. 高阿弥陀遺跡 | 7. 関B遺跡 | 8. 北田遺跡 | 9. 境野野遺跡 | 10. 北塚遺跡 |
| 11. 漆曾根遺跡 | 12. 新青波遺跡 | 13. 南興野遺跡 | 14. 熊野田遺跡 | 15. 手蔵田1遺跡 |
| 16. 手蔵田2遺跡 | 17. 手蔵田10遺跡 | 18. 手蔵田11遺跡 | 19. 手蔵田9遺跡 | 20. 手蔵田6遺跡 |
| 21. 手蔵田7遺跡 | 22. 手蔵田5遺跡 | 23. 手蔵田8遺跡 | 24. 手蔵田4遺跡 | 25. 本川遺跡 |
| 26. 早稲田遺跡 | 27. 桜林遺跡 | 28. 桜林野野遺跡 | 29. 西田遺跡 | 30. 天神堂遺跡 |



- I…暗褐色砂質土（耕作土）
 II…黒褐色粘質砂（遺物包含層）
 III…黄褐色または明黄褐色粘質土（遺構検出層）

0 1m

第2図 遺跡の層序



第3図 遺跡全体図

Ⅲ 検出遺構

1 遺構の分布 (第4図)

今回の発掘調査で検出された遺構は掘立柱建物跡4棟、井戸跡2基、土壇52基、溝状遺構6条の他、建物跡として構成することができなかった柱穴やピット等、登録された遺構は124を数える。これらの遺構は精査区北半部、手蔵田地区から生石地区へ通じる市道沿いに集中していることから、市道沿いが周辺地形より一段高い状況にあるという地形的な要因に沿った傾向を呈している。しかし、溝状遺構(SD21・23)が南東方向に延びることや、Y軸41グリッドに位置する計画排水路の調査でも、北西-南東方向に走る溝状遺構と2基の土壇が、計画排水路西端で検出されたことから、遺構の分布状況は南東方面にも広がると考えられる。また遺構の検出状況の特徴として、建物跡はその東または南に、付随させるような井戸跡や土壇を持つこと、建物跡として組み合わせられた柱穴の囲りには、同様の柱穴・ピット群が隣合するような状況から幾度かの建替えが行われたことなどが掲げられる。これら遺構の時期は、遺構内出土遺物の観察から平安時代末から中世鎌倉にかけてのものと考えられる。以下に各遺構ごと記述する。

(1) 掘立柱建物跡

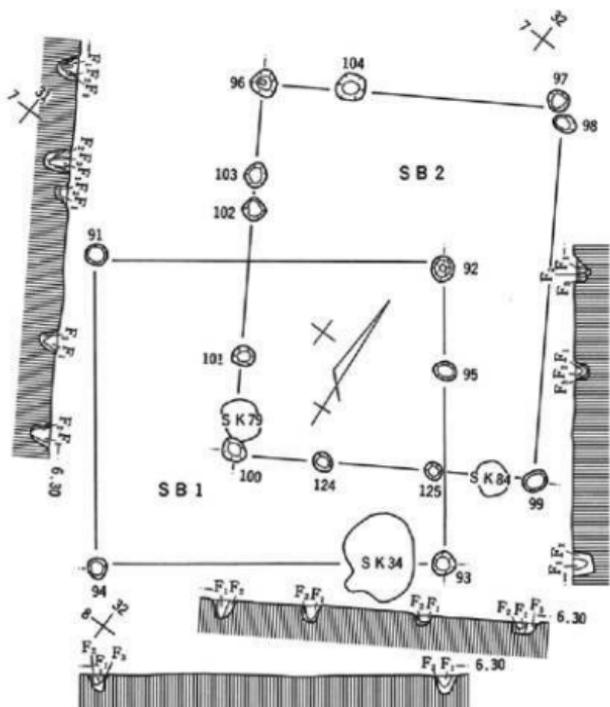
調査で確認された掘立柱建物跡は4棟を数える。いずれも柱配列・柱間距離が各面共に個々様々な配置をしているが、各々が建物跡の構成になる配置となったもので取り上げた。中には柱基部・すなわち柱根として実物を残すものもあるが、他は朽ちて土化した柱穴跡で、それらを線上に組み合わせて建物跡として認めるものである。

SB1・2建物跡(第5図)

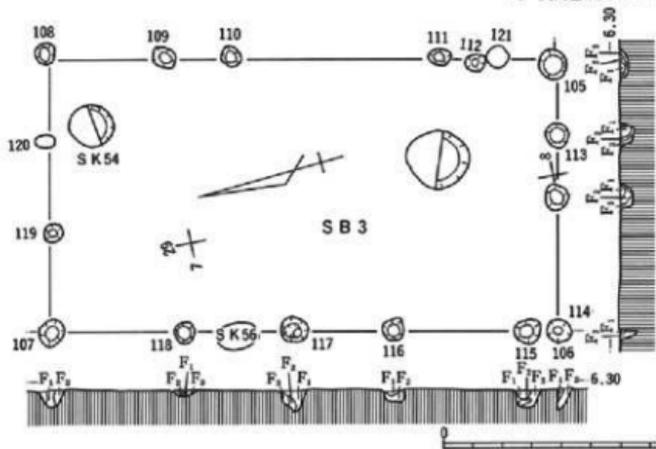
精査区北部31・32-6・7グリッドⅢ層上面で確認された重複棟である。共有した柱穴跡は見られないことから、営みの時期に多少のずれがあるものと思われる。SB1は梁行・桁行1間×1間の4本柱による小屋的な建物跡である。身舎の梁行長4m・桁行長4.7mを測る。その北に重複するSB2は梁行3間・桁行3間の南北棟で、身舎梁行長4.1m・桁行長5.1mを測る。

SB3建物跡(第6図・図版1)

精査区北部28・29-6~8グリッドⅢ層上面で確認された梁行3間・桁行4間の南北棟の建物跡である。柱間距離は身舎西面桁行EB107・118・117・116・106柱穴で北から1.8m(6尺)・1.5m(5尺)・1.2m(4尺)・2.1m(7尺)、北面梁行EB108・120・119・107柱穴で東から1.2m(4尺)・1.2m・1.4m(約5尺)を測る。



F_1 …黒色粘質土
 F_2 …黒褐色粘質シルト
 F_3 …黄褐色粘質シルト



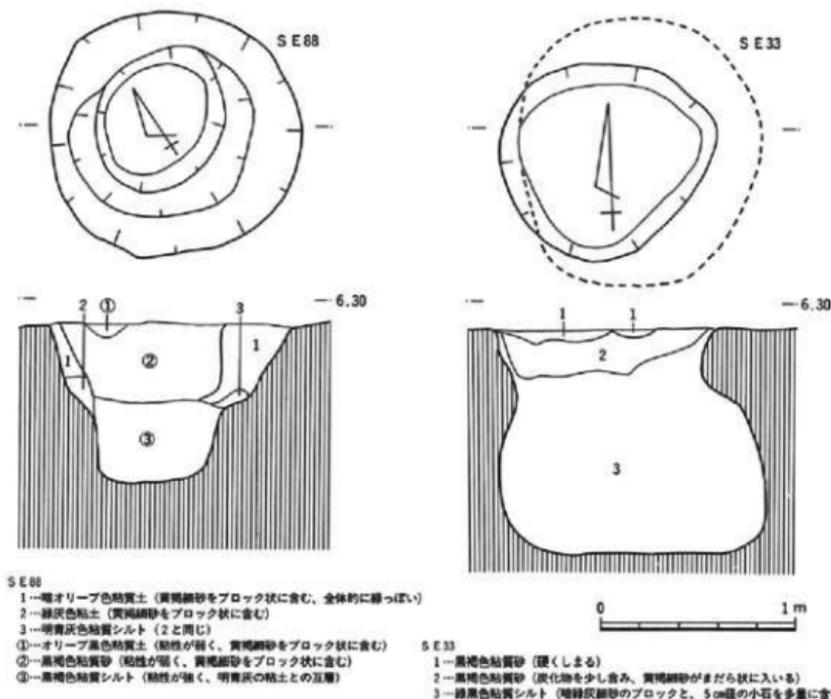
第5図 SB 1・2・3建設跡

(2) 井戸跡 (第7図、図版1)

今回の調査で検出された井戸跡は2基である。2基とも井桁・矢板・横棧組の井戸枠組が取りはずされているため、井戸本来の構造は認められなかった。

SE33井戸跡は、精査区北部東側33-7グリッドIII層上面、SB1ないしSB2建物跡に付随する形でその東隣より検出された。掘り方は東西1.1m、南北1mの不整円形を呈するが、断面形は口部より底辺部が広がるフラスコ状を呈している。深さは115cmを測り、床面より竹製のたがが底部を取り巻くような形で残されていた。覆土は3層に分かれ、3層中位から底部まで小石を多く含んでおり、廃棄後埋められたと思われる。

SE88井戸跡は、32・33-8グリッドIII層上面、SE33より南へ7mの位置で検出された。SE33同様先の建物跡に付随する井戸跡と考えられる。掘り方は東西・南北共1.3mのほぼ円形を呈する。掘り込まれた深さは、最深部で検出面より85cmを測る。井戸枠組は取り除かれているものの、枠組内埋土は黒色炭化物を含む黒褐色粘質土を呈し、本来の井戸跡内部層序列と近似している。



第6図 SE33・88井戸跡

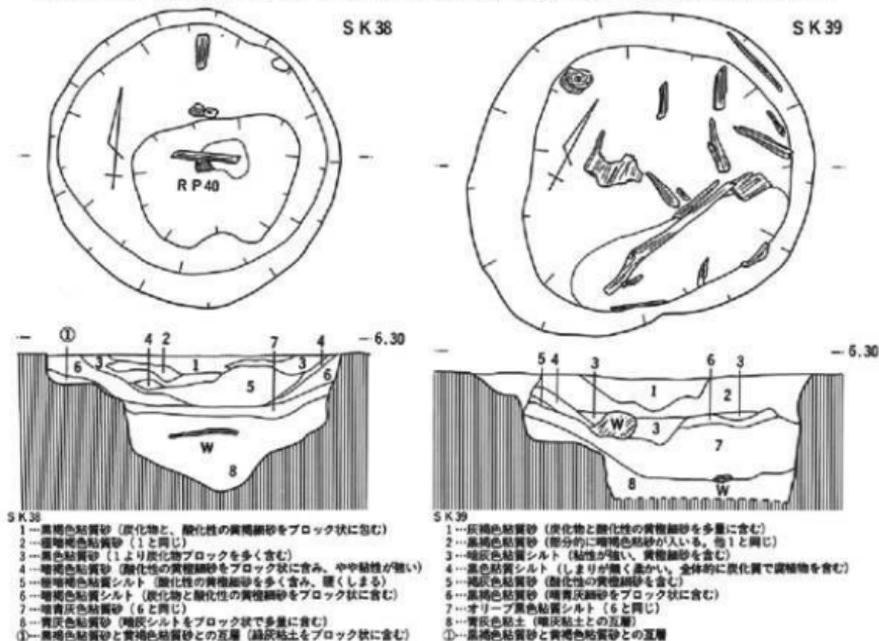
(3) 土壌

調査で土壌と確認され、遺構登録された数は52基を数える。これらを平面形、断面形、覆土の堆積や層観察など観点を逐次変えていくつかの形態に分類できるが、ここではその内部に遺物を包含する土壌を中心に記述する。

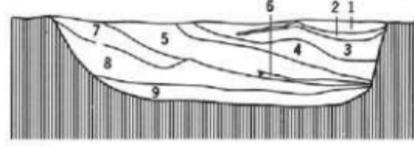
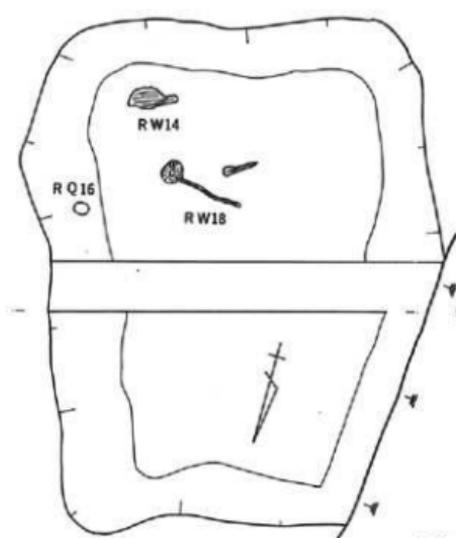
SK38・39土壌(第8図、図版2)は、その形状、規模、性格が近似している。SK38は精査区中央部北側で確認された径2mのほぼ円形を呈し、最深部は掘り込み面より95cmを測る。覆土中からは中世陶器鉢片、曲物底板等が出土している。SK39はこれより北方6mに位置し、SB3建物跡と東隣する。東西2.3m、南北2.4mの不整形円形を呈し、最深部で85cmを測る。覆土中からは数点の板材・木片に混じり加工木も認められた。これら2基の土壌は、先の建物跡に付随した廃棄物用の土壌と考えられる。

SK44土壌(第9図)は、精査区西端の中央北寄りで見出され、平面形は南北3.5mの不整形長方形を呈する大型の土壌である。最深部は掘り込み面より60cmを測る。断面形は船底形を呈し底面は平坦である。出土遺物としては漆器の椀(RW14)木製の柄杓(RW18)があるが、土器是一片も出土していない。

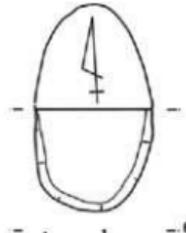
SK47土壌(第9図、図版2)は、精査区北西隅で確認された不整形円形を呈する土壌で



第7図 SK38・39土壌



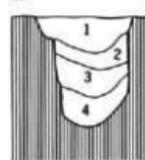
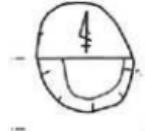
- S K 44
- 1—黒褐色粘質シルト (酸化性の黄褐色砂をブロック状に含む。黄かき)
 - 2—暗褐色粘質砂 (黄かきより強い)
 - 3—黒色粘質砂 (粘性が弱く砂っぽい。他1と同じ)
 - 4—暗褐色粘質砂 (有機物・炭化物を多く含んだ腐植層・粘性はかなり強い)
 - 5—黒色シルト (腐植炭化物)
 - 6—暗褐色粘質砂 (5と同じ)
 - 7—黒色シルト (灰白シルトをまだら状に含む。腐植が強く泥炭の層を越す)
 - 8—黒色粘質砂 (緑灰シルトをブロック状に含む。腐植が強く泥炭の層を越す)
 - 9—暗灰色粘土



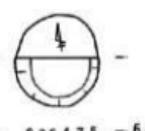
- S K 47
- 1—黒褐色粘質シルト (粘性が弱くかなり強い)
 - 2—暗褐色粘質砂 (粘性がかなり強い)
 - 3—黒褐色粘質シルト (黄褐色砂との混乱層)
 - 4—暗褐色粘質砂 (黄褐色砂との混乱層)
 - 5—黒褐色粘質砂 (1よりも暗く、炭化物を含む)



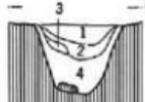
- S K 55
- 1—黒褐色粘質砂 (黄褐色砂との混乱層)
 - 2—黒褐色粘質砂 (黄褐色砂との混乱層)
 - 3—黒褐色粘質シルト
 - 4—暗褐色粘質砂 (粘性がかなり強い)
 - 5—黒褐色粘質砂 (1よりも暗く、炭化物を含む)



- S K 47
- 1—黒褐色粘質砂 (硬くしり、炭化物を含む)
 - 2—1と黄褐色粘質シルトのグラブ層 (両者の混合を含む)
 - 3—黒褐色粘質シルト (黄褐色砂を粗子状に含む)
 - 4—暗褐色粘質シルト (暗緑灰粘質砂を粗子状に含む。黄かき)



- S K 61
- 1—黒色シルト (酸化層の中に黄褐色シルトをブロック状に含む。硬くしり)
 - 2—黒色粘質シルト (全体の半分にはオリブ質粘質シルトをブロック状に含む)
 - 3—黒色粘質シルト (暗灰色を帯び、砂を若干含む。有機物を含む)
 - 4—黒色粘質シルト (やや暗色っぽい。全体的に腐植で有機物を含む)
 - 5—黒色泥炭
 - 6—オリブ黒色粘質土 (多分に泥炭を含む。灰色っぽい)
 - 7—黒褐色粘質土 (6と同じ)
 - 8—黒褐色粘質シルト (暗緑灰粘質シルトをブロック状に含む)



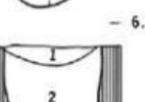
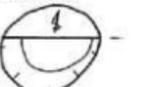
- S K 84
- 1—黒褐色粘質シルト (にじみ質の粘質シルトを小ブロック状に含む)
 - 2—黒色粘質土 (ぼけ粘土化した有機物を多量に含む。粘性が強い)
 - 3—暗灰色粘質土 (2と同じ。粘シルトを含む)
 - 4—黒色粘質土 (泥炭分を多量に含む。水涵性を表す)



- S K 87
- 1—黒褐色粘質シルト (細砂が混じる)
 - 2—黒色粘質シルト (黄褐色シルトと炭化物を含む。粘性が強く粘土化した有機物を含む)
 - 3—黒色粘質土 (泥炭を含む)
 - 4—黒色粘質土 (腐植粘土のブロック状と、未分解有機物を若干含む)
 - 5—灰色粘質土 (ブライ化し粘性がかなり強い。微量の細砂を含む)



- S K 81
- 1—黒褐色粘質砂 (硬くしり)
 - 2—黒色炭化層
 - 3—黒褐色粘質砂 (1よりも粒子の細やかな。腐植砂をブロック状に含む)
 - 4—黒色炭化層
 - 5—黒褐色粘質砂 (明確な腐植砂を含む)
 - 6—緑褐色粘質シルト (暗緑灰粘質砂をブロック状に含む)
 - 7—黒褐色粘質砂 (硬くしり。やや暗色っぽい)



- S K 138
- 1—黒褐色粘質シルト (ぼけ粘土化した有機物及び5-10mmの炭化粒を含む。硬くしり)
 - 2—黒色粘質シルト (有機物を含み、湿りを帯び黄かき)



第8図 S K 44・47・55・61・81・84・87・89・138土壌

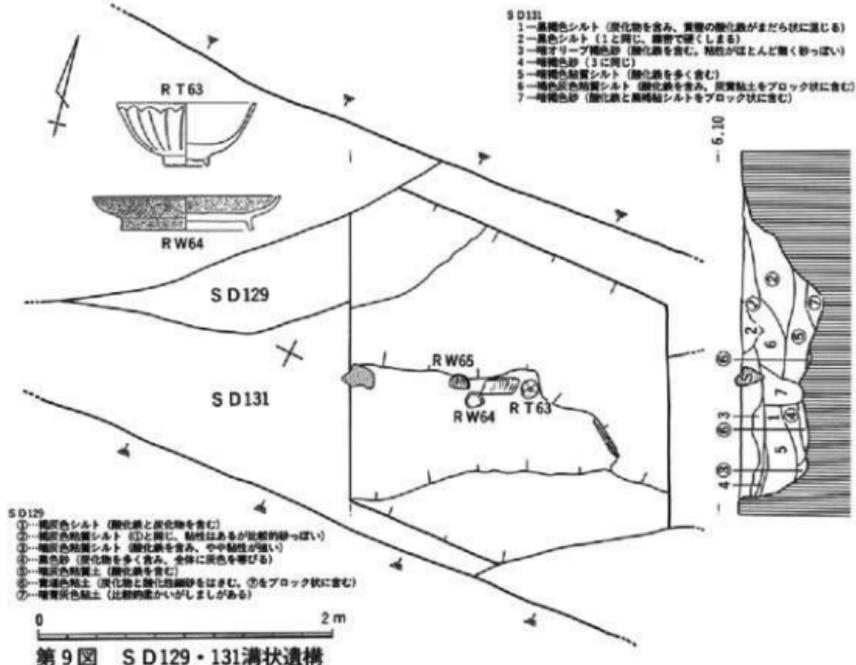
ある。覆土は4層に別れ最深部は75cmを測る。層序は自然堆積を示しており、覆土2層から中世陶器の^{フタビロ}蓋鉢片が出土している。

S K61土壌(第9図)は、S K38とS K39の間で確認された。ほぼ円形を呈し断面形は深さ50cmの壺形を呈する。層序中位の覆土4層がレンズ状に堆積していることから、2回利用された土壌と考えられる。遺物はほぼ完形の硯、漆器、曲物底板等が出土している。

S K81土壌(第9図、図版2)は精査区北端、S B2の北側1mの位置で確認された建物跡に付随する土壌である。平面形は南西部が突出した形を呈するが、本来は不整形円形を呈したと思われる。底面は平坦だが西側壁面で底面より急激に立ち上がる。層序は自然堆積を示すが、土壌東側で深さ27cmを測る掘り込みが見られる。

(4) 溝状遺構

調査で確認された溝状遺構は6条を数える。精査区では東西に走る溝状遺構が2条、南北に走るそれが1条検出された。計画排水路調査区2・3-41・42グリッドで確認されたS D131溝状遺構(第10図)は、S D129との重複溝である。検出面での最大幅は2条重複部で2.7mを測る。層序観察からS D131が新しく、S D129の埋め戻し後新たに掘り込まれたと思われる。最深部は45cmを測るが、埋土堆積途中で中央部をピット状に掘り込んだことが解かる。覆土からは半完形の青磁碗と漆器の坏、曲物の底板等が出土している。



VI 出土遺物

1 遺物の分布

本遺跡で出土した遺物は整理箱にして12箱を数えた。その内土器が6箱、木製品5箱、その他中世陶器・土製品・石製品などが1箱分出土している。これら遺物の総数は2,391片に及んだ。内訳は赤焼土器1,407片と須恵器817片とが圧倒的に多く、その他古代期を示す土師器2片、黒色土器1片、内黒土器8片を数える。中近世陶磁器が100片と比較的多く出土しているのが特徴である。遺構内出土が遺構数の割に少なく、遺物総数の85%を包含層出土で占める。

遺跡全体における分布状況では、遺跡北半部に集中する傾向を示し、精査区を設定したのもこれに基づく。遺構の集中度と軌を一にするが、精査区における包含層出土の遺物は、東側に密で西側に疎の分布状況を示した。耕地整理で遺構が破壊を受け、土器片が散乱したものと考えられる。

表1 出土遺物点数表

出土地点 (遺構内)	土師 器	須恵 器	黒色 土器	内黒 土器	赤焼 土器	磁器	中世 陶器	中世 磁器	近世 陶器	近世 磁器	土製 品	石製 品	木製 品	金属 製品	自然 遺物	その他	計
S E		1														1	2
S K	1	51	1	116	2	5	4	2	5		12	9		9			217
S D		39			78	2	3		6		4	3				2	137
小計	1	91	1	194	4	8	4	8	5		16	12		11	1		356
包含層 (出土)	1	696		8	1,155	1	13	2	42	14	1	6	1	1	1		1,942
X-O		30			58	1			1	3							93
小計	1	726		8	1,213	2	13	2	43	17	1	6	1	1	1		2,035
合計	2	817	1	8	1,407	6	21	6	51	22	1	22	13	1	12	1	2,391

2 遺構内出土遺物

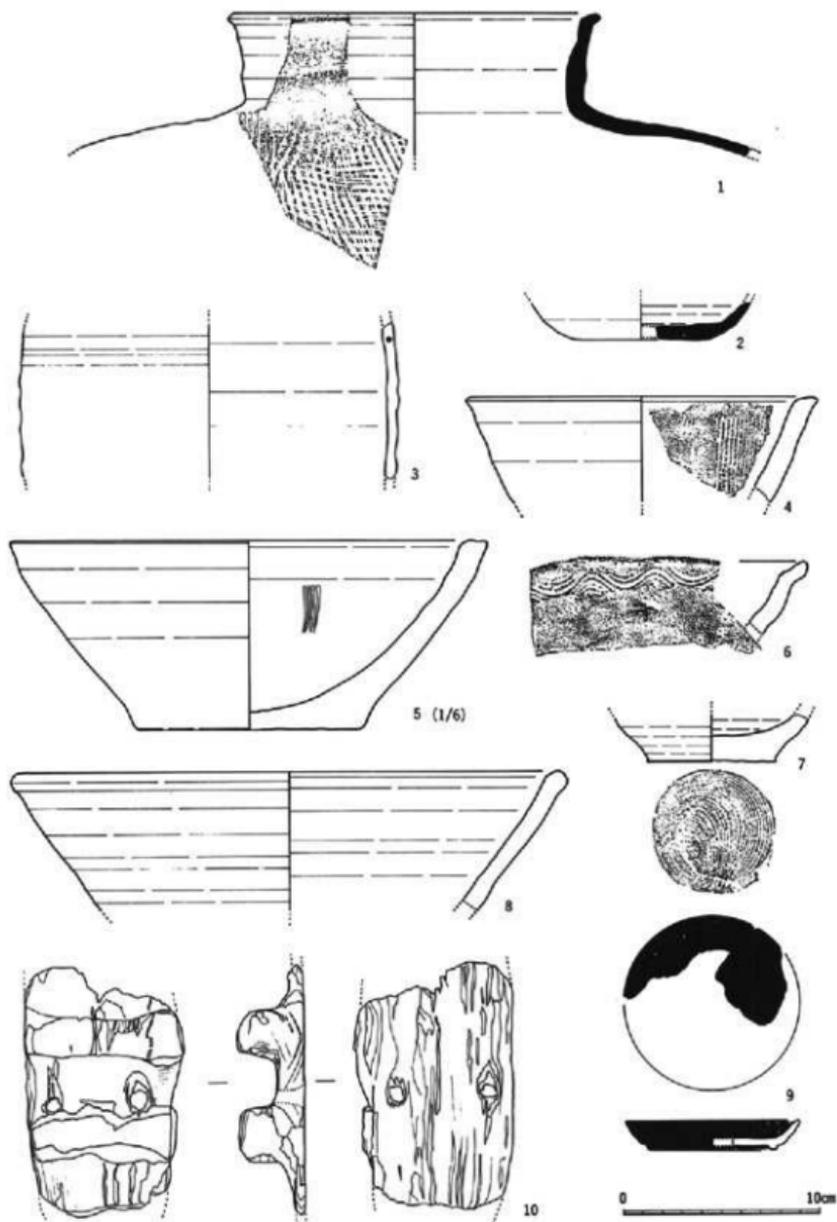
以下に井戸跡、土壇、溝状遺構の順に出土遺物の概要について記述する。

(1) 井戸跡内出土遺物

本遺跡からは2基の井戸跡が検出されている。2基とも井桁、矢板、横棧組という井戸組等の施設は検出されなかった。SE33井戸跡では床面より竹製のたがが検出されたが、測図に勘える遺存状態ではなかった。SE88井戸跡内からは須恵器の細片が1片出土した。

(2) 土壇内出土遺物(第10図、図版3・4)

土壇は52基の遺構登録がなされた。覆土や底面からは土器、石製品、土製品・木製品、金属製品等217点の遺物が出土した。総数における遺物の種別では、内黒土師器が116点と

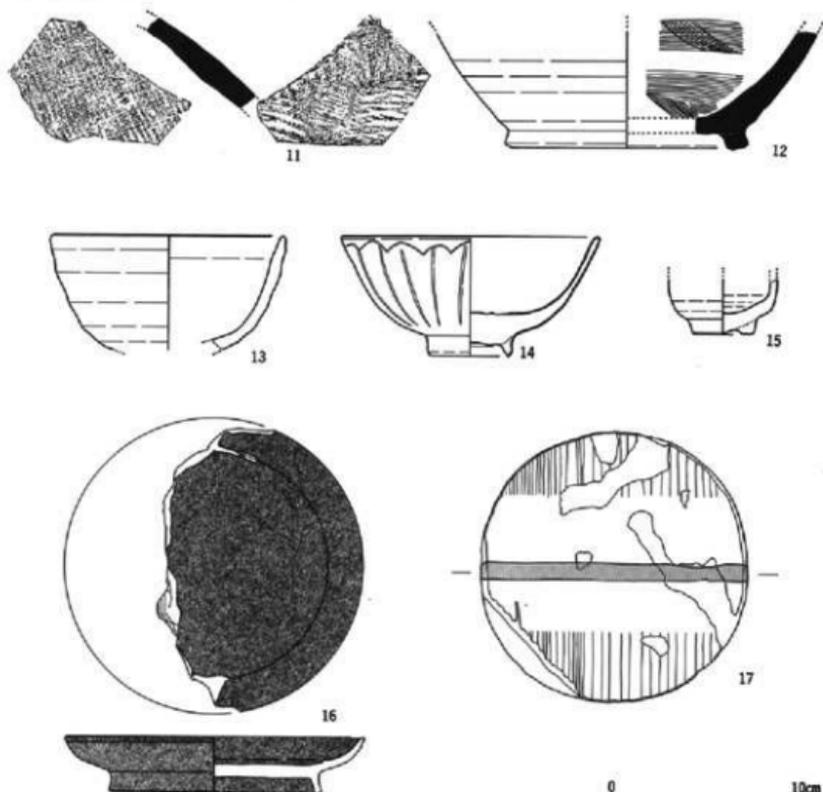


第10図 土壌内出土遺物

圧倒的に多い。しかし、土壌自体の時期を限定するには細片が多く覆土上層での出土である。第10図には、土壌内出土の遺物の中で、性格や時期を明示出来る遺物を掲載した。SK31土壌からは4の中世陶器摺鉢口縁部が3層より出土している。器内面に13条の直線的な卸し目を施す。口唇部は平坦となりやや先端で外側へ反る。3は、SK39土壌より出土した赤焼土器壺の体部片である。外面下半に条線状の叩き痕、上半にクロロ引き痕、内面にも条線状のアテ痕を残している。SK45土壌からは2の須恵器坏片と、6の中世陶器摺鉢口縁部が出土した。須恵器坏は底面が回転ヘラケズリで、底部より体部へやや丸味をもちながら立ち上がる。6は、口唇部内面に五本の櫛書による青海波文を施こしている。木製品ではSK77より10の下駄が出土。SK133からは、径9cm、高さ1.6cmの皿が出土している。

(3) 溝状遺構出土遺物 (第11図・図版3・4)

溝状遺構は調査によって11条検出されている。覆土内からは、須恵器・赤焼土器・中世



第11図 溝状遺構内出土遺物

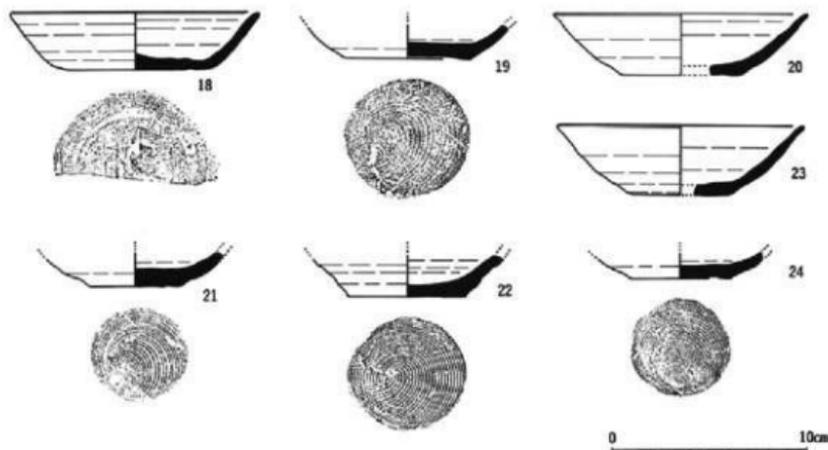
陶磁器の他、石製品・木製品が出土している。調査区東側で検出されたS D23溝状遺構からは、11・12の須恵器甕の体部片と底部片、13・15の近世陶磁器片が出土している。11は表面を格子目状叩き、裏面に青波波アテ痕のタタキ締めを施こしている。12は内面にロクロ回転によるハケ目の条線を残している。13は近世陶器の天目茶碗片である。美濃瀬戸系と考えられる。15は唐津焼と考えられる坏片である。

調査区南西に設置される計画排水路部分でS D131溝状遺構が検出されている。14は、16世紀前半の民窯青磁である。釉調はやや黄ばんだ光沢のない青磁で七官手と呼ばれている。体部表面には、雑な蓮弁の線彫りが施こされている。15・16はS D131より出土した木製品で、16は表・裏面共に黒漆が塗られた坏である。17は曲物底板である。

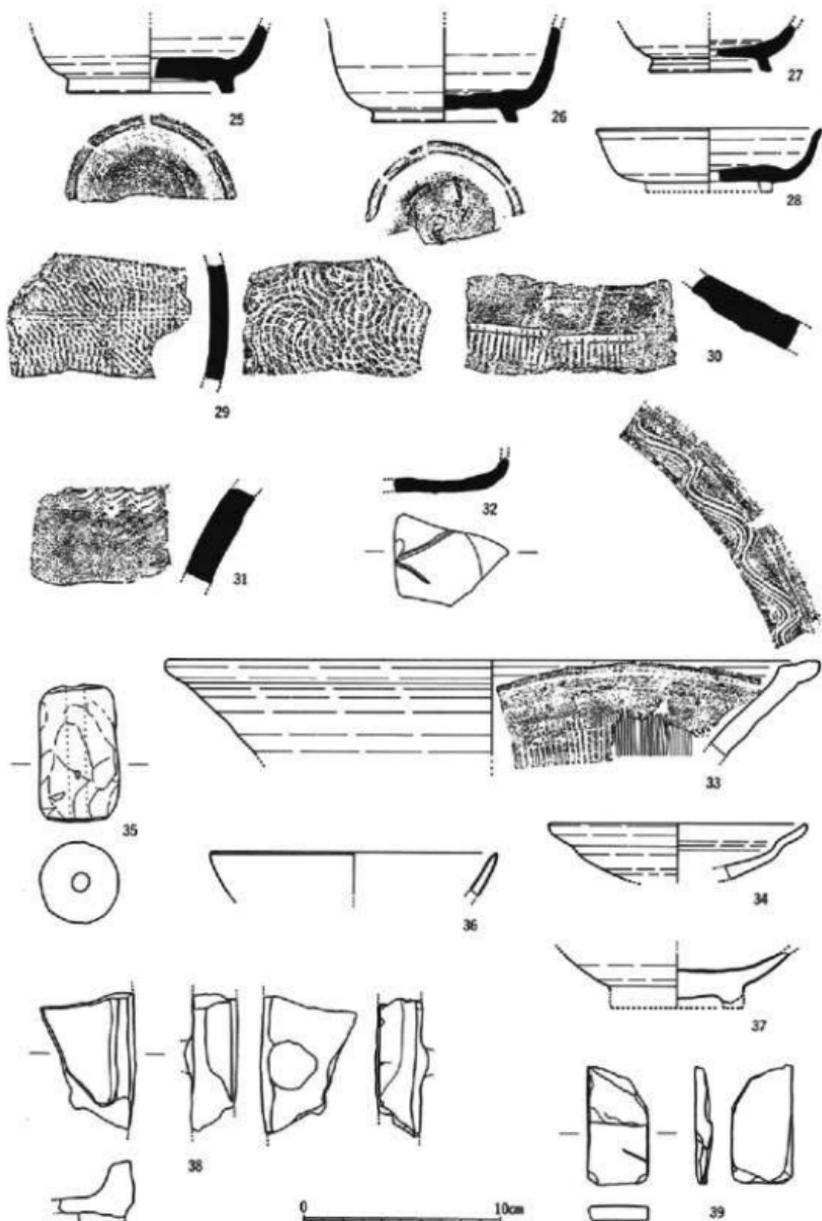
(4) 包含層出土遺物 (第12・13図、図版4・5)

今回で調査された本遺跡の面積は遺構・遺物の集地域を探るため設定したトレンチや決定された精査区域を合わせて2,599㎡の広さになる。トレンチや、重機拡張で広げた精査区内からは多量の土器片が出土した。遺跡の基本層序に合せて取り上げた数は以下の通りである。表面採集93片、包含層第Ⅲ層1,942片の合計2,035片である。

ここでは、比較的図示出来、かつ遺跡の時期や特徴を明示出来る遺物を第12・13図にまとめた。以下に記述する。18～32までは須恵器片である。器種では坏・甕である。18・19



第12図 包含層出土遺物



第13图 包含層出土遺物(2)

は包含層Ⅲ層より出土した須恵器坏片である。底部の切り離しは、回転糸切りで、18は底部より体部にかけてゆる丸味をもちながらゆるやかに立ち上がる。器面を丁寧にナデが施こされている。19は底部の切り離しは回転糸切りである。底部から体部にかけて文字の解読が出来ない墨痕が認められる。20～24は須恵器坏で、20は表面採集の坏片である。これらは底部の切り離しがすべて回転糸切りである。底部でややふくらみをもち、体部へ立ち上がり口縁部がやや外反する。25～31は須恵器高台付坏である。底部はすべて回転ヘラ切り離して、高台を付したのち布ナデで調整されている。器形は底部から直線的に立ち上がるもの(26・28)、やや外反して立ち上がるもの(25・27)がある。焼成は堅く、ロクロ痕がみられ、高台は底部端から外反する。29～31は須恵器甕片である。29は外面を格子目状叩き、内面は同心円状のアテ痕、30は甕頸部片で外面に幅4.8cmの格子目状叩き板で横に叩き痕を施こしている。32は須恵器坏底部である。底面に笥書による「×」印が描かれているものと考えられる。33は、中世陶器摺鉢である。大きく外反し、口唇端部がほぼ水平となり、5条の波文を施こしている。体部内面には幅3.3cmに12条の卸し目が認められる。35は土錘である。棒状のものに粘土を巻きつけ、表面をへら調整している。36は表面採集の近世磁器である。0.5m/mの淡青色釉が施こされている。34は美濃・瀬戸系の皿である。37は龍泉窯系の青磁碗である。体部外面に連弁がみられ、底部内面に片彫りによる草花文と思われる線刻がある。38は器種が不明の瓦器である。39は磁石片である。

V まとめ

遺構・遺物の時期と性格

今回の調査によって検出された遺構は、掘立柱建物跡4棟、井戸跡2基、土壇5基、溝状遺構は6条の他、建物跡として組み合わせることが出来なかったピットや、性格不明の遺構など数多く検出された。本遺跡は、昭和62年度県営ほ場整備事業(平田地区)に係る調査で、昭和62年度補正予算に伴って策定された追加の調査事業である。遺跡は現集落の大槻新田地区を囲むように約2万㎡の範囲となる。分布調査の試掘でも全域にわたり遺構・遺物が検出されている。そのなかでも密集して遺構・遺物が検出されている地域に精査区を設定したものである。また、事業計画での深掘りされる排水路部分も調査区の対象とした。調査では、南北棟となる3棟と東西棟となる1棟の掘立柱建物跡を中心に井戸跡、土壇が囲むように配置されている。確認された遺構精査区北半に集中しており、更に北側へ広がるものと考えられ、広範な広さをもつ遺跡内で集落(建物)を構成する地域が地質等の立

地条件の制約を受け、地点的なまとまりが集合してあるものとする。建物跡で主軸方向が南北棟となるものの中で東に傾きをもつものに分かれる。時期によってその傾きに变化があるのかについては、構成される柱穴内からの出土土器が細片で、時期を限定出来るものはない。しかし、4棟のうちSB1～3とした建物跡は、柱間距離や柱穴内に柱根が残存しているものもあり、建物跡としての構成が考えられる。SB4については柱間距離が不規則であるため、建物跡として断定出来ない。時期はSB1が平安時代末頃に想定出来、SB2・3は、それ以後の中世室町以降が当てられる。SE33・88井戸跡は、その検出位置からSB2・3建物跡に付随するものと考えられるが覆土中からは須恵器細片が1片出土したのみで、それも廃棄後の覆土であるため時期の限定は出来ない。土壇では形状、規模、内容が近似しており、性格も同様なものと考えられる。覆土中からは中世陶器や、木製品が出土しており、生活での廃棄物を捨てる穴を推測される。時期は覆土中からの出土土器により中世14世紀から16世紀にかけての遺構と考えられる。溝状遺構では、計画排水路で検出されたSD131が他の溝状遺構の代表となる。覆土中からは木製品皿や、曲物底板の他、中国民窯と推測される青磁碗が出土した。時期は、16世紀末の室町時代と推定される。

以上遺構、遺物の時期を記述したが、本遺跡の性格は、平安時代末に営なまれた集落とそれ以後室町期に営なまれた集落が重複して存在していたと考えられる。平安期の遺構については正確な情報を得ることが出来なかったが、室町期の遺構についてはその生活の一端を示す用具類が出土している。平安期でも室町期でも、日本海交易による輸入陶磁を用い、漆器を使った痕跡が認められている。この時期についての集落跡調査例はなく、比較検討が出来ない。今後の調査例や資料の収集に期待したい。

参考文献

吉岡康輔「北陸・東北の中世陶器をめぐる問題」庄内考古学18 1982

佐藤禎宏「山形県の中世陶器について」庄内考古学18 1982

阿部明彦他「手冢田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第87集 1985

圖 版



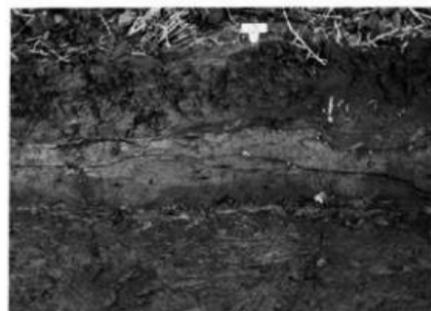
遺跡近景 (南西から)



調査風景 (西から)



精査区全景 (南から)



遺跡層序



S B 建物跡検出状況



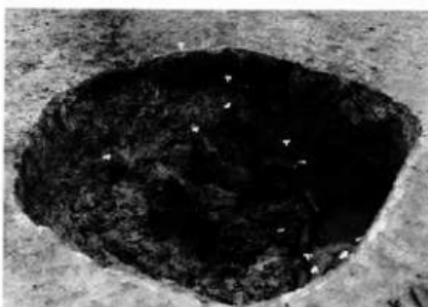
S E 33井戸跡



S E 88井戸跡



S K 38土壤



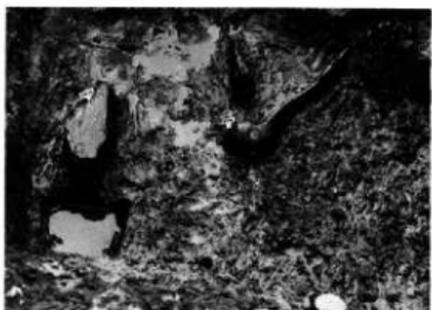
S K 39土壤



S K 47土壤



S K 81土壤



R W 14漆器出土状況



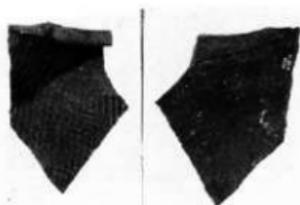
P Q 28碗出土状況



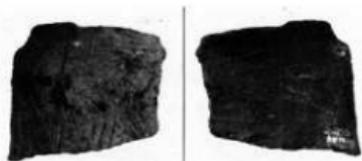
S D 23溝状遺構遺物出土状況



S D 131溝状遺構遺物出土状況



1



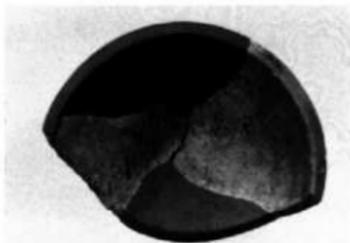
3



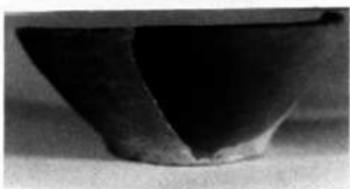
2



4



7



8



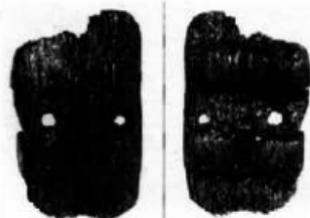
5



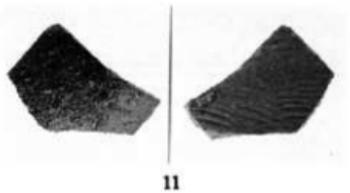
9



6



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



23



22





24



25



26



27



29



31



28



30



32



33



35



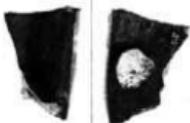
36



34



37



38



39

山形県埋蔵文化財調査報告書 第129集

おおつきしんてん
大槻新田遺跡

発掘調査報告書

昭和63年3月25日印刷

昭和63年3月31日発行

発行 山形県教育委員会
印刷 大場印刷株式会社
